

昭和40年代初め頃に実質、「天理高校農事部の相撲部」であった体制から、「天理高校第二部相撲部」へと変化を始める。昭和44年2月に西南寮が閉鎖、土俵のない陽心寮へ全員が移動。11月、陽心寮が新築されるがここにも土俵はなかった。しかしながら顧問や生徒らの努力の甲斐があり、学校内に新土俵が設置されることとなった。

昭和45年、農事部土木班の手により、待望の新土俵が完成した。土俵の上に屋根もつけられ、6月に三代真柱をお迎えし、大相撲伊勢ヶ浜部屋の大関清国、照桜関一行を招いて、盛大に土俵開きが行われた。8月には工藤弘憲氏が、土俵のない過渡期に地道な努力を続けた成果を発揮し全国高等学校総合体育大会（インターハイ）出場を果たした。

昭和48年1月、新人戦を目前にして4年生の前主将が急に直した。2月の新人戦に向けて、後輩たちに熱心に稽古をつけていただけに、全部員のショックはあまりにも大きすぎた。暫くは何も手がかずにいた。このような状態では試合もできないから新人戦出場を辞退するかという声も上がったが、部員や同僚からの意見もあり、何度も話し合いをした。その結果、「先輩の御霊に喜んでもらうよう、この節を生き節にしようと、部員たちは一手一つになる事ができた」と、当時3年生だった郡川善嗣氏、立川理氏は回想している。

いよいよ新人戦が始まり、一回戦は破れるも、総当たりの5勝1敗13点で優勝し、3月に高知で行われる全国高等学校相撲新人選手権大会（新人戦高知大会）へ出場を果たした。新人戦高知大会での成績は、予選リーグで敗退はしたものの、全員が一勝をあげることができ、先輩が力を貸してくれたと思うと同時に、やればできるという自信をつけることができた大会であった。

当時2年生であった藤田治彦氏は二部で全国大会に出られることは最高の栄誉だと思い、自分も先輩のように全国大会へ行きたいと思っていた。昭和49年、藤田氏はインターハイ県予選において個人戦で優勝をする。インターハイは福岡県甘木市で行われたが予選で敗退。「全日制の力をまぎまぎと見せられた」と語っている。藤田氏が入部したのは1年生時の12月で、入部して最初に驚いたのは冬の凍てつく北グラウンドで行っていた素足でのサーキットトレーニングだったそうである。北グラウンドに降りた時の冷たさや霜柱を踏むザクザクという音が今も甦ると回想する。当時は食堂の横に藤棚があり、その横に土俵、奥に部室があった。教室から部室まで歩いていく間、毎日



大相撲伊勢ヶ浜部屋の大関清国一行を招いて、盛大に土俵開きが行われた。(昭和45年6月)

日がぼろろという気持ちで歩いたり、いやだなあという気持ちで歩いたりしていたが、練習が始まると土俵から見る景色は最高で、北グラウンドではソフ



全国高等学校相撲新人選手権大会にて。対・加茂農林戦において立川理氏が勝利。(昭和48年8月、高知県)

ト部や陸上部、南グラウンドではラグビー部ががんばっている姿が見え、自分の励みにもなっていたそうである。4年生となった昭和50年にも東京の旧国技館で行われたインターハイに連続出場を果たす。予選リーグを2勝1敗で通過し、決勝トーナメントへ進出した。

昭和51年4月、別館南側に新土俵が完成した。三代真柱と、大阪場所を終えた青葉山関はじめ木瀬部屋の力士5人を迎えて土俵開きが催された。部員たちは、おぢば在住のOBとともにプロの力士と汗を流し、生涯の大きな思い出となった。大会の成績は近畿大会予選で優勝し、出場権を獲得したものの、他の行事が重なったため出場権は郡山農業に譲っている。

昭和52年、県インターハイ予選で優勝。中国五県で開催されたインターハイに団体が河坂泰典氏、有井修氏、深川勇氏、花坂伊知郎氏、穴井誠氏、個人で河坂氏が出場を果たし、小粒ながらも善戦する。島根県掛谷市で行われた試合のことを有井氏は、「他校の選手を見ると、完全に身体負けをしていた。しかしながら、一勝をあげることができ、相撲部で最高で最大の思い出である」と語る。この年、近畿大会予選も優勝する。

昭和52年以降、部員が減少する。昭和58年は奈良国体前年ということで部員一同、気合いを入れ各試合に臨む。その結果、近畿大会予選優勝という結果を残す。

昭和59年、減少気味だった部員も増加をする。近畿大会予選も連覇を果たす。この年には第2別館新築のため、土俵を大相撲と同じ大きさのものに造りかえた。昭和60年の近畿大会予選では残念ながら3連覇達成の夢はならなかった。

#### [参考文献]

『荒木』第31号、天理高等学校第二部発行、昭和36年2月。  
『天理高等学校百年史』第二部編、天理中学校・天理高等学校創立百周年記念事業実行委員会、平成20年9月。

#### [訂正]

前号(2011年1月号)8頁、「相撲と天理④」の5～6行目、「第10回国体体育大会(国体)神奈川大会に水邦夫氏が出場」とありますが、正しくは「前島章雄氏が出場」です。ここに訂正し、お詫び申し上げます。